



共同通信



2010年4月28日 164(374号)

日本基督教団 西宮公会教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22
TEL0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email : koudou@gamma.ocn.ne.jp
<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901
ホームページアドレスが新しくなりました。

時代にふり回されるのではない 自分の人生を語ってほしい、
あの時 心を躍らせて生きた 自分の人生を語ってほしい、
後悔に 身をふるわせたこともある 自分の人生を語ってほしい、
笑い 泣き 齒ざりしをした 自分の人生を語ってほしい、
今日 こんな決意をしたという 自分の人生を語ってほしい

To tell the story 64

『はじめのいっぽ、あしたにいっぽ』

園庭で咲いている少し早い桜を見ながら、満開の桜で迎えてくれた1年前の入園式のことを思い出しました。ぼっぼぐみの子どもたちと同じく不安と期待とでドキドキしながら共同幼稚園の門をくぐったあの日。2009年4月の共同通信で“はじめまして！よろしくお願ひします！！”と自己紹介したのがついこのあいだのように感じるほど、本当にあっという間の1年でした。そして、今まで過ごした中でもっとも充実した中身の濃い1年でした。春がきて夏がきて秋がきて冬がきて今まで当たり前のよう過ぎしてきた日々。道端の小さな花や木に目を向け、季節を感じる喜びそんな忘れかけていたたくさんのことを思い出させてくれたのは子

どもたちでした。子どもたちと過ごす毎日は、ドキドキワクワク！！そして、共同幼稚園に来てたくさんのも、たくさんのに出会いました。初めて見たり食べた野菜に果物。最初は、「なにこれ～」のお友達も恐る恐る一口食べると「おいし～い！！」「もうひとつちょうだい」台所からいい匂いがするたびに、目を輝かせながらのぞいていた子どもたち。そんな子どもたちと同様に、あけび、むかご、ざくろ、とうがんなど私をはじめ食べて食べる野菜や果物に目を輝かせながらたくさん味わいました。また、行くたびに新たな発見があった畑との出会い。春はいちご、夏はひまわり、秋はひがんばなにさつまいも、冬はすいせん。ほかに、畑にはブロッ

コリーに桜島大根などたくさんの野菜が。また、足元で力強く生えているのびるやしそからはたくましく生きる小さな命を感じました。季節の移り変わりを知らせてくれる畑。やえむぐらを服にくっつけて楽しんだり、走り回ったり～ 「今日、畑に行くん～」 「いちごできているか見に行こう!!」と畑はみんなにとっては何度でも行きたくなる大好きな場所でした!! また、園庭にあるたくさんの木々。春・みんなを迎えてくれた満開の桜。夏・みんなを涼ましてくれた大きなけやきの木。秋・みんなで掃除したたくさんの落ち葉。冬・葉が落ちてなくなり少し寂しくなった木々。でも、そんな木々に新しい小さな命“冬芽”をみんなで見発見。園庭の木々は、優しくそしてあたたかくみんなを見守ってくれました。そして、そんな園庭から聞こえてくるすてきな歌声。いつでもどこでも口ずさんでしまうほどみんな大好きな歌。「今日は、なに歌う?」と聞くと、いつも数えきれないほどのたくさんの歌がみんなの口から～ 幼稚園で散歩先で出かけた先でいろんな場所でたくさんの人に素敵な歌声を届けてくれました。また、親子で子どもたちで手と手を触れ合い、目と目を見つめ、楽しんだわらべうた。そして、驚くぐらい真剣な表情で見つめ楽しんだ絵本。他にも夢中で遊んだこま、けん玉、おてだま、たけうま。そして、顔を真っ赤に

しながら子どもたちと一緒に跳んだ縄跳び!! たくさんの発見があった散歩や遠出 仲間がいたから歩けた冒険道!! たくさんの笑顔があふれた運動会に公同まつりにクリスマス～!! 書ききれないほどのかけがえのない日々を子どもたちと一緒に過ごしてきました。素直で純粋な子どもたちと過ごす毎日は驚きと喜びの連続でした!! そして、本気で何かに取り組むことの大切さを思い出させてくれました。もちろん笑顔だけとはいかず、思い通りにいかなく泣いて、怒って悔しい思いもたくさんした子どもたち。でも、だからこそたくさんのかを感じ、学び、成長することができたのだと思います。素直に喜び・悲しみ・怒り～今を一生懸命に過ごすそんな子どもたちとともに毎日を過ごせたことを本当に嬉しく思います。また、子どもたちのことを思い、寄り添ってくださった多くの方々、子どもたちと一緒にまたそれ以上に本気で楽しんでくださった多くの方々。公同幼稚園にきて、人の温かさをたくさん感じ、そして自分が多くの方に支えられていることを改めて感じました。多くの出会い、学びが与えられたこと心より感謝いたします。4月から、また新たな出会い・毎日が始まっています!! 子どもたちと一緒に笑ったり、泣いたり、怒ったり～公同生活を存分に楽しみたいと思います!!

(池ヶ谷 里沙)

(見る)ことは人間の感覚の中で格別の地位を占めている。(見る)ことは通常(知る)ことと重ねられるように認識の能力そのものとほとんど区別なく考えられている。眼や眼界を開き、人間を世界のパースペクティブのなかにおく。そのなかで「見えるものはひとりあえず安心する」「見えないことは対象が把握できないだけでなく、自分が定位できない」という、いへん不安な事態なのだ。だから人間は闇を避け、そこに光を投げかけて闇を掃討することを、自分の能力の実現と見てきた(啓蒙とらのまそうらことだ)

(「理性の探求」西谷修)

ヨハネによる福音書は、「初めに言があった、言は神であった」で始まります。と、言(言葉)で始めておいて、すぐに“言は神であった”と言い換え、かつ「言は初め神とともにあった」とも言い換えます。更に、「この言に命があった。そしてこの命は人の光であった」と続きますが、言に命が宿っていたというぐらいの意味に取れます。という意味で、その命は人の光、光は人を輝かせる、という意味で、その命は人の光、光は人を輝かせる、という具合にもなります。

続いて、ひとりの人ヨハネが登場します。ヨハネは神から遣わされた人で、彼の役割は、前述の光を言で証しすることです。命を宿す光を言で証しする人として。光は「すべての人を照らすまことの光」で、その光が「世にきた」ことをヨハネは言であかしします。そうして“まことの光”で“世にきた”はずなのに、「世は彼を知らず」かつ「自分の民」なのに、「彼

(まことの光)」を受け入れません。彼は、「めぐみとまことに満ち」「満ち満ちている」のに、“世”はそれを拒みます。そうってしまうのは「神を見たものはまだひとりもない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」だから世は“彼”を拒むのです(だそうです)。

そうして、神をあらわす“ひとり子なる神”をあかしするのが“ひとりの人”ヨハネにのあかしの言です。この、ああでもあり、こうでもありをまとめると、神であるところのまことの光、既に世にきているその光を証しするのが、ヨハネに福音書の“言”ということにもなります。もちろん、この場合の言は、“そのもの”でないのはもちろんで、そのものとの向かい合い方は、言を介してそれを“信じる”ということになります。“信じる”ことによって実体をもつのですが、ただし、実体そのものではありません 3

ん。信じるのです。

十字架で処刑されたイエスは、当然実体ではなくなります。だから“終わり”ではなく、そこに“完結”を見ようとしています。実体を失くしているのに、完結、即ちすべてを見よう（ないしは語ろう）とするのですから、語る言葉は、ああでもあり、こうでもありにならざるを得ません。こうして、ああでもあり、こうでもありを行きつ戻りつせざるを得ないとしても止むを得ないかもしれません。

イエスは処刑されます。イエスは、その実体を失くすことになります。実体はなくなったはずなのに、実体として現れたりします。「イエスは彼女に『マリヤよ』と言われた。マリヤは振り返って、イエスに向かってヘブル語で『ラボニ』と言った。それは先生という意味である・・・」(20章16節)。ヨハネによる福音書がこうして描いているのは、生きていた人と死んだ人の“会話”です。同じように、死人だったはずの人が、生きていた人の間に現れて語りかけたりします。「イエスが入ってきて、彼らの中に立ち、『安かれ』と言われた。そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった」(20章19、20節)。更に、弟子たちに現れた時に居合わせなかったトマスにも、望みに答えます。「それからトマスに言われた。『あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわき

にさし入れてみなさい』信じない者にならないで、信じるものになりなさい」(20章27節)とされたトマスは「わが主よ、わが神よ」と“了解”するのですが、更に以下のことを求めます。「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」(20章29節)と。いきなり“見ないで信じる者は、さいわいである”と言っている訳ではありません。言を尽くして、時には傍らに立ち、目で見、手で触れさせるということもしながら、“見ないで、信ずる”ということを示し、かつ求めるのです。

“見ないで信ずる者は、さいわいである・・・”は、自分というものの存在の抹消・放棄ではなく、徹底した言葉による論証を介しての見ないで信じるものなのです。見ないで、簡単に信じてしまうことも、見ないで信じるという一歩を踏み出すことの難しさも、避けてはいないように思えます。

(菅澤 邦明)

～今月のいのり～

神様、春への期待をいっぱいこめてこんでいるような桜の蕾が、ほころんでから、あっという間に花開きました。

私たちはいつも、過去のこと、未来のことに思いを馳せて、桜の花を眺めています。

去年も一年間、神様に守られて歩むことができたことを感謝いたします。

今年も一年間、あなたから離れずに生きていくことができますように、導いて下さい。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人につながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。」(ヨハネ 15:5)

この聖句を慰めとして、今年も新しい年度を迎えました。

(大平 有紀)

“桜の満開と共に2010年度が始まりました”

園庭の桜が一つ二つと咲き始めた3月の下旬、子ども達は終了式の日を迎え、新しい帽子をかぶせてもらいました。ドキドキの瞬間、少し緊張した顔で新しいクラスの帽子をかぶって前に並んだみんなは、なんだか少しお兄さんお姉さんに見え、その時からもう“年長さん”“さんぽらったさん”になっていたのです。“帽子”の不思議な力を感じるようでした。

春休みの間、園庭の桜は満開を迎

え、薄いピンクの花が幼稚園中を優しく包んでくれていました。みんなが来る頃にはもう散ってしまうかな...と思っていたのですが、まだまだ花を咲かせたまま、2010年度の始園の日を迎えることができるととても嬉しく思いました。地面に落ちた桜の花、風に吹かれてヒラヒラと舞っていく花びらがとてもきれいで、子ども達は帽子の中に花びらを集めたり、落ちた花をコップの中に入れて浮かべてみたり～と、そんな姿があちこ

ちで見られました。

年長組の子ども達は、次の日早速武庫川へ行き、青空が広がる中、白い布に“こい”を描きました。赤、青、緑、オレンジ、黄色の5色の絵の具を使って、筆で大胆に彩色していきます。“色は重ねない！”“絵具が垂れないように筆はギュッとしぼる！”“次々に色を変える！”みんなでそんな風に確認をして始めます。真っ白な布に、どんどんカラフルな色が加えられていきます。大胆に大きく描いていく子どもたち、きっと気持ちよかったですらうな。たった5色の色だけど、一つとして同じものはありません！一匹一匹が違って、それぞれ世界に一つのものになりました。お家の方がその布をこいのぼりの形に仕上げてください、後日、幼稚園の前の津門川を泳ぎました！

川沿いを歩いている方が足を止めて見てくださったり、今年もこの時期が来たね～と声をかけて下さる方がいたり、この西北の街で子ども達と過ごす毎日の中で、そんな風に心が温くなる場面にたくさん出会うことができます。いつも見守って下さる方がいる、温かく見つめて下さる方がいることに改めて感謝の気持ちでいっぱいになった、そんな時間でした。

「ぼっぼさんまだかなあ？」と、新しいお友達が来るのを首を長くして待っていた年長組やさんぼ・らった

組の子ども達。2010年4月10日、ポカポカと春の日差しが気持ちいい朝、入園式の日を迎えることができました。51名の新しい仲間達は、ドキドキしながら、そしてこれから始まる幼稚園の毎日にワクワクした様子で、礼拝堂へ集まって来てくれました。“先輩”たちもちょっと緊張した様子で、でも元気いっぱい歌ったり手遊びをしたり～とかっこいい姿を見せてくれたのです。今年の始まりも音楽隊！！楽器の演奏に、先生たちもドキドキしながら、でも一緒に歌ってくれたみんなの顔を見て嬉しくなり、リズムに乗りながら楽しんで演奏することができました。

みんなそれぞれに持っている“色”これからどんな色を輝かせていってくれるのか、とても楽しみにです！！

(近山 佳奈)

すずや便り

こんにちは。4月は何か楽しいことがおこるかも、というワクワク気分で迎えることが多いです。埼玉転居を機に書かせていただくようになった「すずやだより」も一年半を過ぎ、子どもたちも小5と中3となりました。お馴染みの方も、はじめましての方もまたよろしく願います。

4月初め、世田谷文学館へ行ってきました。お目当ては「石井桃子展」です。文学館の入り口付近には隣接する建物との境に池があり、錦鯉が何匹も泳いでいます。その高そうなきらびやかな感じに、やっぱり世田谷は違うわと訳のわからない納得をしながら館内へ入りました。

入ってすぐの左手にずらりと並んだ石井桃子さんの本。どれもおなじみのものばかりなのですが、「ふしぎなたいこ」「おそばのくきはなぜあかい」がその中にあるのには驚きました。作者不明の昔話ではなかったのですね～。この2冊も入っている岩波の子ども本シリーズは小学生の頃のお気に入りでした。「百まいのきもの」「うみのおばけオーリー」は寂しい感じが苦手だったのですが、訳者があのうさこちゃんと一緒、と知ったときには意外な感じがしたものです。表面的なイメージではなく、芯のある物語という共通

項があったのだなと感じるのは、大人になって意識して読むようになってからです。小さい頃はそんなことは考えずに読んでいたのですが、知らないうちにたくさんの石井桃子作品に出会っていたのですね。

さて、階段を上がって2階の展示会場へ入ります。その中に「ドリトル先生航海記」の展示がありました。『この作品は石井が丹念に下訳をし、井伏が文章に手を入れたものだった。』（世田谷文学館HPより）。「Pushmi-Pullyu」という架空の動物を「オシツオサレツ」と訳してしまう井伏鱒二の感性のすばらしさを、実に楽しそうな文章で紹介してあります。「いやいやえん」の修正原稿ではちこちゃんの一場面を読み比べ、本を作る舞台裏を見た高揚感のまま仕事場を再現したところにきてみると、机の上には広辞苑とそれより一回り以上大きい特大の英語の辞書が3冊(4冊?)も!言葉に厳しく接するからこそ楽しい世界に連れて行ってくれるんだなあ、と頭が下がりました。

あの辞書を見てしまったからには翻訳ものと、ヒルダ・ルイス作の「とぶ船」上・下巻をお土産にしました。家の本棚の中身を模様替えしたくなりますね!

(富家 香麻里)

みかん便り

・4月です。気温も暖かくなって、だいぶ過ごしやすくなりました。桜がきれいです。咲く時期が短いのが寂しいですね。すぐにピンクから緑に変わってしまいます。

春休みも終わりのころ、高知から愛媛に幼馴染がやってきました。知る人ぞ知る“でかちゃん”です。高知から3時間かけて小雨の中震えながらやってきました(笑) 京都ですら会った事のない西北人と西宮以外で会ってる不思議さで終始雰囲気になじめなかったんですが、ホンマに楽しい2日間でした。

野球で有名(らしい) 済美高校横のコンビニで待ち合わせ。合流してからうちに来て一休み。彼が来る前に自分なりにちゃんと部屋を片付けたんですが、その部屋を見て「汚ねっ！」っと一喝。。んまに口が悪い子です。それから松山名物の『とんかつパフェ』を食べに行きました。初めて食べたんですが、あれはオススメできません。TVでたまに「美味しい!!」と言っている芸能人の方々がいらっしゃいますが、ないです。あれはないです。でかちゃんと2人で泣く泣く完食しました。カツ丼は絶品だっただけに勿体ない(泣)

それから気を取り直して道後観光。道後商店街を探索して、道後温泉の周りで写真を取りまくり、足湯に浸

かりながら、からくり時計を見て、最後に坊ちゃん列車と一緒に記念写真をとるというマニュアルどおりの観光をしました。でも、さすがはマニュアル! 楽しかったです。商店街のみかんを大量に売っている八百屋さんの看板がなぜかバナナの絵だったのはツボでした。もし松山に来る機会があれば、ぜひ道後まで足を伸ばしてくださいね。

その後は飲みに行って、次の日は大学案内と松山城見学に行くなど一通り遊び歩いたんですが、楽しい時間はすぐに終わって、彼は颯爽と高知に帰って行かれました。

楽しい時間が早く過ぎるっていうのは普通のことなんですが、夜中に2人で喋ってたことに、大学入ってからあっという間に時間が過ぎたっていう話題がありました。僕は今年で大学に入って半分か過ぎ、折り返し地点になりました。無事20歳になり、今からはしっかり将来のことも考えていかなくはならないっていうのは薄々気づいてきています。おかんと電話する度にこの話になります。おかんが心配してくれてるのはメッチャわかりますが、自分でもいっぱい悩んでる時期なんで、正直ほっといてほしいです。夢もあるけど、それになるための最善の道が見つからない状態なんですが、そんな時に横から

何べんも同じ事言われたらイライラしてきます。親不孝なんですかね？今は、進路・勉強・バイト・付き合い、、やりたい事、やらなあかん事が多々あるんですが、折り返し地点の最初の春にしっかりこれからの大学生活を整理していこうと思った4月の頭でした。

難しいこと考えてますが、とりあえずダラダラ楽しまずに、先を見てやることやりながら楽しんでいこうってことです

でかちゃんと喋ってたらダラダラしちゃうんで、しばらくは会いません(笑)次は夏休みかな？

それじゃあ新学期頑張っていきましょう！
でわでわ～

(河村 高志)

大切な贈り物・津門川 9 1

“津門川塾の歩み”

第 1 回津門川塾

日時：2005年3月12日（土）午前10時30分～

“津門川の河川環境に関するアンケート調査結果報告集会”

報告：古武家善成（兵庫県立健康環境科学研究センター）

第 2 回津門川塾

日時：2005年6月18日（土）午前10時30分～

テーマ・報告：1. 津門川の魚類相調査から見えてくるもの 藤田朝彦（近畿大学農学部）・

・ 2. 津門川のアユは大阪湾の河口から魚道を利用して遡上する

山本義和（神戸女学院大学人間科学部）

第 3 回津門川塾

日時：2005年9月24日（土）午前10時30分～

テーマ：「津門川の植物相」

報告：野崎玲児（神戸女学院大学人間科学部 環境・バイオサイエンス学科）

第 4 回津門川塾

日時：2005年12月10日（土）午後2時～

テーマ：「津門川の水質と川と人とのかわり」

報告：中澤 暦（神戸女学院大学大学院人間科学部 環境生態系研究グループ）

第 5 回津門川塾

日時：2006年4月8日（土）午前10時～

“2005年度水環境文化賞の受賞感謝と報告の集まり”

第 6 回津門川塾

日時：2006年7月8日（土）午前10時30分～

テーマ：「川づくり、街づくり」 報告：南昭和町自治会、甲風園1、2丁目自治会、西宮市環境学習サポートセンター、兵庫県阪神南県民局

第 7 回津門川塾

日時：2006年10月14日（土）午前10時～

テーマ：「津門川右岸道路を遊歩道化する“夢”の実現の為に」・

報告：南昭和町自治会、甲風園1・2丁目自治会、西宮市環境学習サポートセンター、兵庫県阪神南県民局

第 8 回津門川塾

日時：2007年2月10日（土）午前10時～

テーマ：「身近な河川における化学物質問題」

10 報告：川合真一郎、黒川優子、松岡須美子（神戸女学院大学人間科学部 生態毒性学研究室）

第9回津門川塾

日時：2007年6月9日（土）午前10時～

テーマ：「野生メダカが生活し、繁殖できる自然環境を求めて」

報告：山本義和、大枝かをる、北井秀美（神戸女学院大学人間科学部 水圏環境科学研究室）、阪本義樹（西宮市環境都市推進グループ）

第10回津門川塾

日時：2007年11月17日（土）午後1時～

テーマ：「津門川と街づくり」・ 報告：森栗茂一（大阪大学コミュニケーションデザインセンター）

第11回津門川塾

日時：2008年5月10日（土）午前10時30分～

テーマ：「『いのち』を共に生きる・にしきたが変わる・津門川が変わる」

報告者：矢田貝充彦（にしきた商店街会長）

助言者：古武家善成（参事・企画調査課長（財）国際エメックスセンター）

助言者：山本義和（神戸女学院大学人間科学部 環境・バイオサイエンス学科）

第12回津門川塾

日時：2008年9月13日（土）午後2時～

テーマ：「津門川自然観察」

報告者：菅井啓之（京都ノートルダム女子大学教授）

第13回津門川塾

日時：2010年4月24日（土）午前10時～

テーマ：「にしきた・つとがわ・きのう・きょう・あした ～4月の津門川を散策する」

講師：山本義和（神戸女学院大学名誉教授）

津門川塾の前身には、現在も幼稚園や教会学校の子どもたちが参加している“津門川川掃除”がありました。そして津門川塾から生まれたのが“にしきた街づくり協議会”です。塾の背景と発展、そして街の中にある川を通して、ひとつの小さな“歴史”を感じる機会が津門川塾です。次回開催は下記の通りです。ぜひご参加ください。

第14回津門川塾

日時：2010年5月16日（日）午後2時～

場所：西宮公会堂集会室

テーマ：「にしきた・つとがわ・きのう・きょう・あした
～5月の津門川を散策する」

講師：森栗茂一（大阪大学名誉教授）

2010年4月 あんなこと こんなこと...

教会学校から

《3月の活動報告》

3月7日(日)
おやきを食べよう

3月14日(日)
吹き矢大会!

3月21日(日)
教会学校入学式・ガーデンパーティ

3月22日(月)
教会と子どもセミナー 2010

3月28日(日)
新入学生と歌を歌おう!

《4月、5月の活動予定》

4月4日(日)
イースター礼拝
2010年度のイースターは4月4日でした。
イースターのお話の後、園庭で卵クイズ、
卵探しを楽しみました。

4月11日(日)
高松公園で大なわ大会

4月18日(日)
ペシャワール会企画
「アフガンに命の水を」DVD鑑賞会
“みんななかまさ”、週報

4月25日(日)
紙飛行機大会!

5月2日(日)
いちごつみ

5月9日(日)
“母の日”コンサート

5月16日(日)
森栗先生に“川”のお話を聞く

5月23日(日)
作って遊ぶ

5月30日(日)
石川啄木カルタ大会!

まいのなんでも案内

どうもこんにちは。ことしの春は絶対地球がおかしなことになっている！と思っている舞です。だって寒いよ！？あったかくなかったと思ったのにまた寒いよ！？周りでも風邪が流行っていますし、何だか穏やかならないですね。これはきっと私たち人間界のあずかり知らぬところで何かが起きているに違いない！守り人シリーズのサグとナユグみたいな重なっている異世界だとか、ハリポタの魔法界だとか！と思っでは日々現実逃避しております。いやでもそういうことってある気がしませんか？そうでもしないと説明つかないですこの気象は！しかも地震も断続的に起こってますしねえ……。怖いものです。

さて、そんな非科学的なことばかり考えている私ですが、最近温故知新といえますか、初心にかえるといいですか、昔読んで育ったものをよく読み返しております。仕事で同じようなものを読んで育った人とお話することが多くて懐かしくなる、というのもあるんですが、やっぱり自分の原点で面白いんですよ。あーそういやあのときそんなこと思いつながら読んだなあとか。年齢が違おうと感じ方も違おうなあとか。中でも非常に懐かしく、初めて家族以外の

人と盛り上がったのが、デ・アミーチス作『クオレ』（副題に「愛の学校」とつくものも）。いやー懐かしかった！！タイトルすらマイナーですよ。昔カルピス劇場？でアニメ放映していたらしいのでご存知の方もいるかもですが、中の「母をたずねて三千里」が有名な割に、全体の知名度は圧倒的に低い！そしてどんな話かもぜんぜん知られていない！非常にもったいないと思います。というわけで今回は紹介！

「クオレ」は、一言でいえば、イタリアのボーイズスクールライフの一年間を日記形式でつづったものです。中は、1. 主人公エンリコ（10歳ぐらい？）の日記 2. エンリコの家族からエンリコにあてた手紙（交換日記感覚？） 3. エンリコが学校の授業で先生に月1回聞く話（「母を訪ねて三千里」なんかはこの話です）の3パターンからできています。短編集感覚で読めるということですね。で、面白いことは面白いのですが、そもそもこの話、非常に政治的な意図を持って書かれたものらしくてですね、つまり、バラバラだったイタリアの様々な地方の人々に、「きみたち全てがイタリアというひとつの国なんだよ！」という意識を持たせるために書かれたので、ときどき非常に鼻

につきます。でも、でもだがしかしです
ね、そこに目をつぶれば、非常にお
もしろいんですよこの話。特にエン
リコの日記部分。クラスメートがそ
れぞれ個性豊かで。親の職業がいち
いち出てきて、当時のイタリアの身
分制度的なものを感じるのはいち
いち置いて、絶対これは「誰が好きか」みた
いな話になると思うんですよ。あ、で
もたぶん人気のあるキャラクターは
2、3人なのですが。(私は小さい頃
デロッシが好きでした。非の打ち所
のない超絶優等生。ちょっと嫌味な
ぐらいに。最近読み返したらコレッ
ティが素敵でした。)

以前、どなたかが『カラマーゾフの
兄弟』は、『ハイテンション！イケメ
ン三兄弟』というタイトルで、体育会
系と文化系とアイドル系の三人のイ
ケメンを表紙にしたらそれだけでだ
いぶ人気が出るだろう、とおっ
しゃっていましたが(そして最近実
際にそんなビジュアルの漫画化され
ておりますが)、クオレもそれに近い
ものがあるような……。そういえば
「イケメン」という言葉って定着しま
したねー。私非常に違和感だったの
ですが。「格好いい」「男前」では表せ
ないニュアンスがあるということ
でしょうか……。これからどこまで生
き残る言葉なのか、少し興味があり
ます。あ、話がずれた。

あとあと、学校で月に一回習う
話っていうのがどれもこれも泣けて

泣けて……。！それこそ、「愛国心」を
沸き立たせるような内容なのですが、
それでもやっぱり泣けます。私のお
ススメは『フィレンツェの少年筆
耕』。これは幼心にも響きました。『ク
オレ』、なかなかとっつきにくいタイ
トルの本ですが、ぜひ読んでみてく
ださい！

(高橋 舞)

つとがわ 編集後記

宗教、“信”に関わることを、「見ないで信ずる者は、さいわいである」と言いきっているのがヨハネによる福音書です。全くいきなり、手掛かりもなしにではなく、ヨハネによる福音書の場合の手掛かりは“言(言葉)”です。「・・・しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスが神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」とも描かれています。ヨハネによる福音書のイエスが「わたしはよい羊飼いである。よい羊飼いは、羊のために命を捨てる」と言ったりするのは、“・・・と知っている”“・・・ということ”などではなく、掛け値なしに、全くそのこととして一歩も引かない何かとして、示しているのだと考えられます。

“信じる”が、何かを放棄して委ねる営みではなく、自分はもちろん世界をそのことでえぐる何かでありたいというのが、ヨハネによる福音書の、言葉をめぐる営みという意味です。

(K)

先日、私の大好きな Rie fu のミニライブに出かけてきました。一年前にも同じ場所で行われていたのですが、歌をくちづさみながら、一年の早さも感じたりしました。会場にいた人たちみんなでラララ～と歌い、とても気持ちがいいひと時でした。

声にだしてついつい歌ってしまう事ってありませんか？幼稚園からの帰り道、夜風を感じながら Rie fu の歌をついつい声に出して歌ってしまう今日この頃です。

(I)

吹田の万博記念公園へ行ってきました。まだ桜が少し残っている頃で、桜も楽しみながら、静かな森の中を散策したり～と自然にいっぱいパワーをもらって帰ってきました。

家の近くには鶴見緑地があります。近いとかがえって行かないのですが、せっかく近くで自然が感じられる場所なので、今度足を運んでみようかな、と思っています。

(Y)

切り紙でちょうやこいのぼりを切ったり、桜を見にいたり、春を感じている日々です。4月も終わりを迎えようとしているのに、まだ暖房が手放せなかったり・・・。分厚めの上着を着て外

出しているのが、なんだか妙な感じがします。でも、街に出てぶらぶら～ウィンドーショッピングをしていると、春色の服がたくさん並んでいるのにうきうきします(欲しいものが増えて・・・困ったり)。早く分厚めの上着の出番がなくなればいいのになぁと思うこの頃です。

(N)

89歳の父、2006年から3年にわたった特養での生活、昨年春からは誤嚥性肺炎で入院となりそれが今も続いている。父はあの太平洋戦争勃発後、1942年2月に繰り上げ卒業そして入隊、1943年3月にニューギニアという激戦地に赴く。戦争のことを書いた文章があるがそこに「弾薬も食料もなく」「衣食住もなく」「10万に近い将兵が山野に屍を晒すことになった」中、「九死に一生を得て祖国に」帰還してきた。もともと無口ということもあり、また戦争のこともほとんど語らなかつたし、今や認知症でただただ笑顔で「はい」「ありがとう」「どうも」「おう、これはこれは」などと言うだけ。幼いころの思い出は、今と同じ、あまり声を荒げることもなく静かだったことが印象に残っている。でも食べ物の好き嫌いをする時だけはその優しい父の顔が怖かったのを思い出す。今の父の毎日は、変わり映えのしない病院食を食べさせてもらっていつも完食、熱とかで不調でも食べる意欲は落ちない。「ゲゲゲの女房」というNHKの連続ドラマが始まった。1週間に一度くらいしか見る事ができないが、好感の持てる雰意気で楽しみにしている。原作も貸してもらって読んだ。水木しげる、88歳、ニューギニア体験。父親と一緒にだったんだ。水木さん自身の他の体験記も読みながら父の語らない古い古い時間に思いを寄せる。「ゲゲゲの女房」と合わせて届けてくださったのが、「わが勲の無きがごと」(津本陽)、ニューギニアを体験した義兄のことを思い出語りにした作品。2010年春、「ニューギニア」が重なった。

(J)